HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	郷村観光の定義とその重要性に関する一考察
Author(s)	張, 広帥
Description	研究ノート
Citation	Sauvage : 北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院院生論集, 6, 83-90
Issue Date	2010-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/42876
Type	departmental bulletin paper
File Information	Sau6_007.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

【研究ノート】

郷村観光の定義とその重要性に関する一考察

張　広帥
観光創造専攻　修士課程
kousui@cats.hokudai.ac.jp

１．はじめに

2009 年 12 月に中国国務院が発表した「観光業の加速発展に関する国務院意見」によると、「観光業は戦略的産業であり、消費資源が少なく、他産業との連動性が高く、就職機会を多く創出でき、総合的効果が高い。中国は、2020 年には観光業の規模、品質、効率ともに世界の観光強国の水準をめざす」という目標が示されている。経済成長が著しい中国は、2010 年代後半にアジア諸国で起こると予想されている「第 4 次観光革命」（石森 2008）を先導する国の 1 つとされている。また、世界観光機関（WTO）は「中国は 2020 年に、世界で最も多い 1 億 3,710 万人の外国人旅行者を受け入れる国になり、世界で 4 番目に多い 1 億人の中国人旅行者を送り出す国になる」と予測しており（国松・鈴木 2006）、世界中から広く注目されている。

「大交流時代」（石森 2008）の到来とともに、中国においてもさまざまな観光形態が続出しており、その 1 つとして近年、「郷村観光」という観光現象が研究対象として取り上げられている（中国では「郷村旅遊」と呼んでいるが、本研究では「郷村観光」と呼ぶこととする）。「郷村」とは、一般に田舎や村里などのことを指す。中国では、後述する「三農問題」の解決手段としてだけでなく、地域社会の自然環境や暮らしぶりなどを維持する手段として、郷村観光が注目されている。そのため、中国国内で郷村観光に関するさまざまな事例調査や研究も行われている。しかし、研究者によってさまざまな考え方が存在するため、郷村観光に対する理解が深まらない状況にある。

そこで本研究では、郷村観光とは一体何であるかを明らかにするために、郷村観光および類似する観光形態の考え方とその特徴を比較・整理した上で、中国社会の現状に即した郷村観光の定義を改めて行う。また、三農問題への対応や郷村の自然環境や文化の保全など、中国国内の問題解決に向けた郷村観光の重要性を指摘する。

２．これまでの郷村観光の定義とその特徴

郷村観光については、これまで研究者がさまざまな定義と解釈を行っている。しかし、郷村観光における理論研究は始まったばかりであり、基本的な概念に対する認識や方向性などが異なったり、明確にまとまっていなかったりするという現状にある。ここでは、中国国家旅遊局の郷村観光に関する報告書や中国国内外の研究者の定義などをもとに、郷村観光の考え方を整理する。

中国国家旅遊局の郷村観光に関する報告書『概念、類型、過ち、問題と対策－中国の郷村観光に対する 5 つの質問』（2006 年）の中で、郷村観光とは「現在、都市と設定された観光地以外の地域で起こっている観光の特徴を備える産業のことである。すなわち、直接的に観光客にサービスを提供する産業のことであり、通常は農村集団経営あるいは個人経営で以下の業界に幅広く関与もしくは関与可能な産業を

含んでいるー旅行業および関連業、宿泊施設経営業、飲食業、娯楽業、小売業、水上旅客運送業、道路旅客運送業、レンタル業、文化サービス業」とされている。しかし同時に、「この定義では、直観的に郷村観光の内容と実際の業態を知ることが難しい」とも述べ、郷村観光の曖昧さを指摘している。

楊旭（1992）は、「郷村観光は農業生物資源、農業経済資源、農村社会資源から構成された立体景観を対象とした観光活動である」と述べ、主に農村の景観を資源として活用する観光であることを強調している。また、王兵（1999）は、郷村観光の定義について「農業文化景観、農業生態環境、農事活動および伝統民俗を資源として、観賞、考察、学習、参加、娯楽、ショッピング、レジャーが一体となった観光活動」と指摘している。王兵の定義の中では、農村そのものの自然環境や文化が考慮され、郷村観光について幅広い定義を行っている。2 人の定義では、地域社会の自然環境資源や文化資源などが郷村観光にとって不可欠な要素であると認識されている。

「郷村観光は郷村の空間環境と、都市と農村の相違を利用する」という点を強調する肖佑興（2001）は、「郷村観光は、郷村の空間環境という名目のもとに、郷村独特な生産形態、民俗風土、生活様式、風景、家屋、郷村文化などを対象として、都市と農村の相違を利用して、計画と設計と商品を組み合わせている。そして、主に観光、遊覧、娯楽、レジャー、長期休暇を過ごすことと、ショッピングが一体となった一観光形態である」と述べている。

一方、郭娜（2009）は「観光村は村里の本来の地理空間で、郊外にある郷村環境、生産方式、郷村文化を利用し、観光客を誘致することである。また、観光客の観光活動を通して、経済価値を創造する新しい村里の一形態である。観光村の名称と呼び方は他村との衝突がなく、簡単に言えば、観光村は農村が観光活動を行った産物として現れるものである」と述べている。郭娜は、中国の郷村観光を研究する前に、中国の「村」の概念を「村は中国の農村住民の集落である」と認識したうえで、「観光村は、農村が観光活動を行った産物として新たに現れるものである」と述べ、今までの定義と違う観点が示されている。

日本で郷村観光の研究を進めている緒方（2009）は、「中国の郷村観光の『郷村』という言葉は行政的境界がたいへん曖昧である。混乱を避けるために郷村観光を、特に行政村が主体となって行うものである」という特徴を述べている。

郭娜と緒方は、郷村観光における定義の内容は同一ではないが、定義を行う方法は共通している。まず、「村」または「郷村」という言葉の概念を明らかにし、基本的な概念や考え方、方向性などを明確に認識した上で、郷村観光の定義を行っている。このように郷村観光について論じる前に、郷村そのものの概念を整理することも重要といえる。

３．郷村観光の類義語とその特徴

郷村とは、前述したように田舎や村里のことであるが、中国国内では郷村観光と類義した観光形態も数多く見られる。そこで、郷村観光の類義語とその特徴を比較・整理した。

まず、「農業観光（agricultural tourism）」とは、農業資源を活用した観光形態であり、具体的には収穫体験や農産物の食体験、農家民泊などがあげられる。農村地域の中で行われている農業以外の観光活動は、農業観光の範囲に含まない（中国国

家旅遊局 2006)。

次に、「農村観光（rural tourism)」とは、農村地域で行われる観光形態を指している。具体的には田園風景を楽しんだり、農村を散策したりするなど、農村地域で行われる農業体験以外の観光活動も含んでいる。農村観光は農業観光を含んだ観光形態といえる。

また、「生態観光（ecotourism)」とは、人々が自然保護を意識し、自然環境に配慮しながら楽しむ観光形態を指す。具体的には、自然の散策や動植物の観察などがあげられ、農村地域に限らず、さまざまな地域で取り組まれている。現在の中国で行われている生態観光は、動植物の生態を観察することだけではなく、後述する郷村観光の一環として行われているという特徴が見られる（緒方 2009)。

「三農観光」とは、後述する「三農問題」を解決することを目的とした観光形態を指している。三農観光は農村地域の活性化や農民の貧困からの脱却などをめざして取り組む観光形態であるが、具体的な活動内容については十分に明確にされていない。

最後に「農（漁）家楽」とは、農業（漁業）と観光業を結びつけ、農村地域の経済活性化を目的に取り組まれる観光形態である。具体的には、農家の飯を食べる、農家の家屋に住み、農業を体験する、農家の風景を楽しむ、農業の生産物を購入することであり、郷村観光の発展過程の初期段階である（緒方 2009)。農（漁）家楽では、観光活動だけでなく、カラオケやマージャン、トランプといった娯楽も含まれており（展鳳彬 2009)、地域資源や文化との結びつきがない活動が批判される場合もある。

４．本研究における郷村観光の考え方

これまで、郷村観光に関する先行研究および類義語を比較・整理してきた。これらをまとめると、表-1 のように整理できる。そこで、活動範囲および活動内容の観点から、郷村観光の定義を以下のように考えたい。

まず、郷村観光の活動範囲については、農村地域で行われる観光活動を想定している。緒方（2009）は、「行政村が主体となって行うもの」と主張しているが、現在の中国では、「社会主義新農村建設」による農村の都市化が進んでおり、農村と都市の違いが判然としない。また、1980 年代から始まった「改革開放政策」以来、農村地域の産業構造が大きく変化し、農村住民は農業に携わるだけでなく、加工業や建設業、鉱業、交通運輸業、商業、サービス業などの第二次産業、第三次産業にも携わるようになった（中国国家旅遊局 2006)。こうした農村地域の範囲規定の重要性については、OECD（1994）も「ルーラル・ツーリズムの定義を求めるには、まず農村自体の概念の理解から始めなければならない」と強調している。そのため、「村」や「鎮」などの行政範囲としての農村地域で行われる農村観光と、行政範囲にかかわらず郷村の特徴を持つ地域で行われる郷村観光では、活動範囲が異なるものと考えられる。したがって本研究では、行政範囲としての都市内であっても、郷村の特徴を持つ地域を含めて、郷村観光の活動範囲と捉えることとする。

次に、郷村観光の活動内容については、自然環境や農業、景観、文化など、農村が本来持つ固有の資源を活用した観光活動を指す。例えば、農（漁）家楽は農業（漁業）と観光業を結びつけることで農村地域の活性化をめざすという点で郷村観光との共通点も見られるが、農（漁）家楽は必ずしも地域資源を活用した活動内容に限

定していない。しかし、農村地域の持続的発展をめざすには、地域住民が主体となり、地域固有の資源を活用し、地域の特色を活かすことが重要である。そのため、農（漁）家楽は農村地域の活性化をめざすという点で、緒方（2009）が指摘するように、郷村観光の初期段階と位置づけてもよい。ちなみに、郷村観光と農村観光の活動範囲に差があることを指摘したが、両者の活動内容についてはほとんど違いがないと考えられる。

これらを踏まえた上で、本研究では郷村観光を「主に地域住民が主体となって農村の特徴を持つ地域で行われる、自然環境や農業、景観、文化などの地域資源を活用した観光形態」と定義する。

表-1　郷村観光と類義語の特徴

名称	特徴	活動範囲	活動内容
農業観光	収穫体験や農産物の食体験、農家民泊など、農業資源を活用した観光形態	農村	農業体験
農村観光	田園風景を楽しんだり、農村を散策したりするなど、農村地域で行われる観光形態	農村	農業体験以外の活動も含む
生態観光	人々が自然保護を意識し、自然環境に配慮しながら楽しむ観光形態	－	自然体験
三農観光	「三農問題」の改善に向けて取り組まれる観光形態	農村	－
農(漁)家楽	農業（漁業）と観光業を結びつけ、農村地域の経済活性化を目的に取り組まれる観光形態	農村	地域資源を活用しない活動も含む
郷村観光	主に地域住民が主体となって農村の特徴を持つ地域で行われる、自然環境や農業、景観、文化などの地域資源を活用した観光形態	主に農村	第2・3次産業にかかわる観光活動も含む

（注）活動範囲および活動内容の「－」は言及がないことを示す。

５．各国のルーラル・ツーリズムとその内容

郷村観光の定義について明らかにしてきたが、郷村観光を英訳すると「ルーラル・ツーリズム（rural tourism）」と考えることができる。そこで、ルーラル・ツーリズムについて国際機関や各国の考え方や特徴を整理する[1]。

まず、OECD はルーラル・ツーリズムを「農村で行われる観光」と簡潔に定義している（OECD 1994）。しかし、「より深く検討すると、ルーラル・ツーリズムの単純な定義ではさまざまな目的に対応できない。同様に、あらゆる国のすべての農村地域に適用できるような、より複雑な定義を行うことは難しい」（OECD 1994）と述べ、ルーラル・ツーリズムに多様性があることを指摘している。その中で、ルーラル・ツーリズムが持つ特徴として、「ほとんどすべてのケースにおいて、農村らしさがルーラル・ツーリズム商品の中心的でユニークなセールスポイントになっている」（OECD 1994）ことをあげている。

また、欧州を中心とした各国のルーラル・ツーリズムの内容は表-2 のように整理

表-2　欧州各国のルーラル・ツーリズムの特徴

国名	特徴	出典
イギリス	自然保護運動との連動が濃厚である。農家も自然保護運動そのものをセールスポイントとした民宿などを経営し、宿泊客も自然保護の直接的体験として農家などに滞在する。また、フランス同様、古い農家などを購入した元都市住民による農家民宿も増える傾向にある。	山崎（2005）
	国民の 80%が年に 1 回以上農村を訪ねており、自然とふれあうことは国民のライフスタイルとして定着している。	鈴江（2009）
フランス	世界最大のバカンス大国であるフランスでは、農家民宿のスタイルも多様化している。さらに、農業の活性化対策という性格よりも、農村そのものの活性化を観光で行うという姿勢が強い。したがって、空き家を都市住民などが購入して別荘代わりとし、その結果地域活性化ができればいいといったスタンスが広がりつつある。	山崎（2005）
	財政支援として農家民宿開業時に工事費の 30%までの補助があり、農家民宿に対する税の優遇措置もあるものの、グリーンツーリズムは農業としてよりむしろバカンスの一環とみなされ、観光を主体とした農村振興をめざしているのがフランスの特徴である。	鈴江（2009）
ドイツ	ドイツ農村では、“農家で休暇を”事業は、基本的には農家の維持ならびに農村の存続をめざしている。しかし、専業農家のみではなく、兼業農家での民宿経営も増えている。その一方で、副業的な存在から専業的な民宿経営への移行も増えつつある。	山崎（2005）
	ドイツは農家経営の強化や田園ビジネスの創出による雇用促進を重視している。	鈴江（2009）
オーストリア	基本的には、スキーなどの山岳観光(Hochalpintourismus)である。農家の所得確保が基本である。ただ現実には農家民宿が淘汰されつつあり、専業化と廃業を経て、減少傾向に入っている。	山崎（2005）
ギリシャ	農家女性の経済的自立促進の 1 つの手段として、農村ツーリズムが進められている。各地に女性農業ツーリズム協同組合が設立されている。	山崎（2005）
イタリア	農家が行うアグリ・ツーリズモ（Agriturismo）と農家以外が経営する農村ツーリズモ（Turismo Rurale）とが並立して存在する。この両者を分けるのは農業生産行為の有無にある。今日では両者の競合状態が生まれている。	山崎（2005）
スペイン	1990 年頃に北スペイン（バスク、ナバラ、アルゴン）から始まり、1995 年頃から南スペイン（アンダルシア）に広がる。アグロリスモと呼ぶ。山岳地域での農業不振が背景にある。	山崎（2005）

できる。欧州各国のルーラル・ツーリズムの特徴を見ると、古い農家や空き家などを都市住民が活用する事例や、田園や山岳などの地域固有の資源を観光活動に活用している例が見られる。このように地域固有の資源を有効活用することで、農村地域の経済活性化だけでなく、地域住民の暮らしぶりやライフスタイルの改善、さらに女性の社会参加や経済的自立の促進などを通じて、持続可能な地域の実現をめざしている点が共通している。他方で、オーストリアの事例に見られるように、農家民宿が減少している国もあり、ルーラル・ツーリズムの経済効果をいかに高めていくかという課題も残されているといえる。

一方、日本のルーラル・ツーリズムについて見ると、農林水産省のグリーンツーリズムの内容が欧州各国のルーラル・ツーリズムの内容とほぼ同じであり、グリーンツーリズムとして定着している。農林水産省は 1992 年にグリーンツーリズムを「農山漁村地域において自然、文化、人々との交流を楽しむ滞在型の余暇活動」として位置づけ、農村滞在型の余暇活動においては、主として都市の住民が余暇を利用して農村に滞在しつつ行う農作業の体験その他農業に対する理解を深めるための活動と定めている（鈴江 2009)。そして山崎（2006）は、「その活動内容は多岐にわたるが、現在のところ農業体験、農産物の加工・直売や農家レストラン、農家民宿などが主に取り組まれている。つまり、グリーンツーリズムは、いわゆる物見遊山的な観光旅行や豪華なリゾート（保養地、行楽地）での滞在ではなく、たとえ短期間ではあっても農村に滞在し、そこに住む人々とのふれあいを大切にする余暇活動ということができる」と指摘している。

日本のルーラル・ツーリズムでは、余暇活動の中で交流や体験、学習など、「農村に滞在すること」が強調されている。そして、従来の「見る（see）型、画一型、周遊型」の観光から、「する（Do）型、参加体験型、交流・交歓型、滞在型」の観光への変化が意識されている。しかし、日本の持続可能なルーラス・ツーリズムのマニュフェストを著した Bernard Lane は、「農村ツーリズム自体、複合的で多面的な活動の集合体である。もちろん、農村での滞在ばかりが農村ツーリズムではない。そこには自然観察を主体とした休暇やツーリズム、ウォーキング、登山や乗馬での休暇、アドベンチャー、スポーツ、健康療養、ハンティング、釣り、教育旅行、芸術や遺産観光等が含まれ、一部にエスニック・ツーリズムも入る」（山崎 2005）と述べ、「農村に滞在すること」よりも活動内容を強調している。また日本では、農家ではないリゾート（保養地、行楽地）に滞在することはルーラル・ツーリズムに含まないのに対し、ドイツでは広範囲のツーリズム現象とビジネス効果の両方を重視し、ドイツ独自のルーラル・ツーリズムを解釈している。Angela Schöppner は、「農村部で展開されている農村ツーリズムを“田園で休暇を”（Urlaub auf dem land）と呼び、その中心を占めているのが“農家で休暇を”（Urlaub auf dem Bauernhof）である。前者はドイツ国内にあるさまざまなリゾートや森林地帯、湖沼地帯、農村地帯で展開されるツーリズム全般を指し、後者は農業経営者が主役となって行っている副業的なツーリズム・ビジネスを意味する」（山崎　2005）と、ドイツのルーラル・ツーリズムを捉えている。

６．中国における郷村観光の重要性

現在の中国の開発政策では、「農民、農村、農業」のいわゆる「三農」における「社会主義新農村の建設」が重大な歴史的任務として取り上げられている。「三農問題」

とは、「農業」の低生産性、「農村」の荒廃、「農民」の貧困といった「農」が抱える3 つの問題をいい、中国の経済社会の持続的発展を脅かす不安定要因となっている（展鳳彬 2009）。そこで、農民の「脱貧困と豊かさの確保」、農村の「余剰労働力の有効利用」、農業の「産業の構造改革と生産性向上」を目標として、三農問題の解決に向けて取り組んでいる。実際、2005 年の中国共産党第十六届全国大会では、「生産の発展、豊かな生活、農村風紀が乱れないこと、整然たる村、民主管理の要求に基づいて、各地の現状を踏まえて、農民の意志を尊重し、新農村の建設を着実な歩調で進めていく」という国家的な任務が発表された。さらに、2007 年の中国共産党第十七届全国人民代表大会の中で、胡锦涛国家主席は「農業が盛んであれば、産業基盤も強くなる。農民が豊かになれば、国家も繁栄する。農村が安定すれば、社会も安定する」と三農の重要性を指摘している。

郷村観光は 1980 年代に始まったが、中国国家旅遊局は約 20 年間、郷村観光に対してほとんど主だった動きを行ってこなかった。しかし、1998 年に中国国家旅遊局は「華夏（中国の古称）郷村観光」をテーマとし、郷村観光の振興に向けた取り組みを始めた。また、2006 年と 2007 年をそれぞれ「中国郷村観光年」、「調和郷村観光」に定め、大規模な広報活動と開発事業を展開した（郭娜 2009）。さらに、2009 年を「中国生態観光年」と定め、中国の郷村観光が新しい観光時代を迎えることになった。

このように郷村観光が政策として位置づけられるにつれて、郷村観光は農村地域の新しい収入源となり、農村地域に経済的な豊かさをもたらし始めている。また、郷村観光の主体となっている農民たちは、地域固有の自然環境や文化を観光資源として観光客に提供するようになり、一定の経済効果も見られる。これによって、郷村観光が三農問題の解決に寄与する可能性も芽生えている。

郷村観光はこうした三農問題を解決する可能性があるだけでない。郷村観光を通じて、地域の自然環境や文化の保全、農民の生きがいの創出、誇りの醸成などの効果も考えられる。したがって、欧州各国で見られるルーラル・ツーリズムと同様、郷村観光は農村地域の持続的発展の新たな手段として期待できる。

7．おわりに

本研究では、中国の郷村観光という観光現象を明らかにするため、郷村観光の定義とその重要性に関して考察した。まず、中国国家旅遊局の郷村観光に関する報告書や中国国内外の研究者の定義とその特徴などをもとに郷村観光の考え方を整理するとともに、郷村観光の類義語とその特徴を比較・整理した。その上で、本研究においては、郷村観光を「主に地域住民が主体となって農村の特徴を持つ地域で行われる、自然環境や農業、景観、文化などの地域資源を活用した観光形態」と定義した。また、郷村観光に相当する各国のルーラル・ツーリズムの特徴を整理し、比較・検討した。さらに、郷村観光が中国の構造的問題である三農問題の解決だけでなく、地域の自然環境や文化の保全、農民の生きがいの創出、誇りの醸成などを通じて、持続可能な農村地域の実現可能性を持つことを明らかにした。

本研究は、これまでの先行研究をもとに郷村観光の定義や特徴について考察してきた。今後は郷村観光を実践している現地のフィールド調査を行うことで、郷村観光の実態を明らかにし、中国農村地域の発展の方向性、とりわけ農民の生きがいの創出や誇りの醸成といった、経済面以外の効果についても検証したい。

【謝辞】
本研究の作成にあたり、レビュワーを務めていただいた観光創造専攻博士後期課程の森重昌之氏から貴重なアドバイスを賜った。ここに記して感謝の意を表したい。

【参考文献】

日本語
石森秀三（2008）「観光立国時代における観光創造」石森秀三編『大交流時代における観光創造』北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院, pp.1-20.
国松博・鈴木勝（2006）『観光大国　中国の未来』同友館
OECD（1994）*TOURISM STRATEGIES AND RURAL DEVELOPMENT*, OECD/GD, 94, 49p.（http://www ; downloaded on 2009.12.24）
緒方宏海（2009）「中国における「郷村観光」の実態に関する社会人類学的研究」『旅の文化研究所研究報告』第 17 号, pp.1-14.
鈴江恵子（2009）『ドイツグリーン・ツーリズム考－田園ビジネスを創出したダイナミズム』東京農業大学出版会
山崎光博（2005）『ドイツのグリーンツーリズム』農林統計協会
展鳳彬（2009）「中国の新型観光農家楽－四川省・成都市を事例に」同志社大学大学院政策科学研究科, pp.241-246.

中国語
郭娜（2009）『旅游村特色化建设及空间竟合关系研究』東北財済大学修士論文
商业研究(2007)『新农村建设中辽宁乡村旅游发展对策研究』（http://www.gx-info.gov.cn/zt/viewwenzhai.asp?id=1168）
王兵（1999）「从中外乡村旅游的现状对比看我国乡村旅游的未来」『旅游学刊』, pp.38-42.
肖佑興（2001）「论乡村旅游的概念和类型」『旅游科学』, pp.8-10.
楊旭（1992）「开发乡村旅游势在必行」『旅游学刊』, pp.38-41.
中国国家旅遊局（2006）『概念、类型、误区、问题和对策』（http://www.cnta.gov.cn/html/2008-6/2008-6-2-21-16-49-29.html ; downloaded on 2009.12.11）

【注】

[1] 本研究では、郷村観光の英訳を rural tourism と捉え、各国のルーラル・ツーリズムについて比較・整理しているが、国や地域によっては同様の観光形態を「グリーンツーリズム」と呼称している場合もある。そこで、グリーンツーリズムと呼んでいる場合も含めて、ここではルーラル・ツーリズムと捉えて分析した。